

最強騎士に憧れて体現しようとしてるTS転生主人公君?? ♀はお嫌い  
いですか

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

シグルド（型月）の強さに憧れてしまったTS転生主人公君?? ♀  
が頑張るお話。

1話1話短め、読みやすく投稿しやすい作品を目指しています。

基本1話1000〜2000文字目安

2023. 1. 24. 日間総合3位

## 目次

シグリーヴァは転生者である。	1
主人公詳細	5
神ヘステイアと神ヘファイストス	8
ミアさんは母親じゃないけどミア母さんと呼びたくなる。	11
デュエ：原作開始iiiiiiiiiii!!!	14
この兎君が半年後にはレベル5に上がってるなんて信じられない。 チートやチーターやビーターや！	17
神フレイヤは嫉妬する。	19
レベル7とおNewな魔法	21
魔法と世話焼きオツタルさん(32歳)	26
聖地巡礼ならぬ原作イベント巡礼	28
お節介、それは憧憬の邪魔にならない程度に。	34
神の宴、その中心で神はパーリナイ!と叫ぶ	37
モンスター・フィリア。私?豊穡の女主人でウエイトレスしてますが 何か	40
シグリーヴァ・ヘリアの日常。それは37階層での闘争	43
第ン千回神会	46
ベル君救出委員会会長シグリーヴァ	49
うーん過剰戦力	52
(シグリーヴァにとっての)ご褒美回	57
前門のゴライアス後門の■■■	61
前門のゴライアス後門の■■■獣	65
前門のゴライアス後門の■■■獣	69

シグリーヴァは転生者である。

大英雄。そう聞いて誰を思い浮かべるであろうか。ヘラクレス？  
妥当である。アキレウス？それもそうだ。カルナ？うんインドチー  
トやめいや。クーフリーン？日本じゃ知名度あんまり無いけど大英  
雄の枠組みには十二分に入るね。

「私」も男。否、男だったと言えるだろうが。私の中での大英雄はただ  
一人、シグルドであつた。いや、言い訳をするならソレを見るまでは  
カルナ推しだったのだが。A p o c r y p h a カッコよかつたし。  
でも異聞帯のあれは反則だ。男のロマンを体現したその姿に同性の  
癖に惚れてメガネ俺も欲しい！と視力1.0には不要な伊達メガネ  
を買つたりもした。

ひよんなことから転生して早二十と云年。その憧憬染みた光は今  
でも心の中で自分の芯を形作っている。

そう、「俺」は「私」となり、偶に「当方」と一人称を真似しながら、  
「戦士の王」となる為、理想を体現する為に此処に立っている。シグル  
ドに！私は！なる！

さて、今私はどこにいるんでしょうか！（イ〇ト風）

正解は！ダンまち世界のダンジョンに居ます！

誰に喋ってるかつて？視聴者だよ視聴者、君には関係ないよ。大丈  
夫、狂ってなんか居ないってヘデイン。

さて、本日はですね、このフォモール軍団を1人でぶっころしてい  
きたいと思えます！

あ、ヘデイン阿呆とか馬鹿とか言わない！せっかく神ヘファイスト  
スに打って貰ったんだから。試し打ち、試し打ちだから。

というわけで見届け人は堅物有能メガネです！私は好きだよ？…  
好きなのはメガネだけど！

48層まで一日で踏破した上で先日リポップしたばかりの49層のフォモール軍団を殲滅。50層で寝て帰宅。

それが私シグリーヴァ・ヘリアが立てた計画であった。

ドロップアイテム？フォモール軍団のを2人で持てば一杯になっちゃうでしょ。魔石？私の魔法じゃ全部お釈迦になるじゃん。素材半分あげるから行こうよ行こう！

そんな強引なお誘いに屈した同僚のヘディンには、ドロップアイテムの半分をお裾分けと言う名前の押しつけを行う。

だって一人じゃ持ち切れないもん。

サポーター？だから言ったじゃん試し打ちって。試し打ちにそんな時間使えないよ。

今は気持ち良く自分の「理想」に近づく為のイメージを固める。レベル6という現状においての高みへ至っても、小指程も「シグルド」になれてないと思うその飽くなき渴望は、一つの絶技へとシグリーヴァを誘った。

【蒼天よ、堕ちろ。黄昏よ、来たれ】

シグリーヴァが持つ唯一の魔法、そしてステータスが背に刻まれた時から発現している相棒の如きソレの名は———【黎明剣】

「魔剣完了。我が矜恃、此処に示そう。」

構えるは大剣。172あるシグリーヴァの身長程ある大剣と、その身に宿すは魔法の光。蒼い光を放つその本質は「対魔属性」。膨大な魔力を過剰な程に刀身に流し込み、其の儘に飛び上がる。

目指すはバロール、穿つは心の臓。必中と云うには驕りもあるだろうが、「戦士の王」は必中とするだろう。ならば私もそうだろう。

ふわりと大剣を手放せば振りかぶるは右腕。握り込む拳、打ち出すのは自らのメイン武装。斬り捨てた方が早いなんて言うんじゃない。私の原点を穢すな。

「禍津・黎明剣」

呼び名こそ同じ「ベルヴェルク・グラム」ではあるが本質はまた別にある。シグリーヴァの持つ大剣は破滅を司り聖剣と対をなす魔剣では無いし、魔法だったただの付与魔法である。

イメージと、膨大な努力と、身に付けた技量だけで成し遂げる擬似宝具。それがこの対軍染みた必殺の一撃である。

流星となった剣は寸分変わらずバロールの魔石を貫通する。次の瞬間にはシグリーヴァの掌が大剣の柄頭に添えられていた。

バロールの身体には刀身を通して空間を揺らす程の振動が伝わり、呆気なくその身を塵へと変える。

寸勁。そう名前の付く技術であるがソレをレベル6のアビリティで行えば瞬間移動染みたものに見えるであろう。

スキル【魔装】。魔力消費と引き換えに特定アビリティの数値を上昇させる。今回は筋力と敏捷。

これにより右手一本で大剣「グラム」を十全に扱える。

左手には短剣であり5本ある【フロツディース】の一本を逆手に構える。

頭を即決で潰され素材に変えられたフォモール達はオコであった。闘技場の一步外で見守るヘディンには見向きもせずに分人に全てのフォモールが向かってくるのを見れば、女性が浮かべて良い笑顔では無いソレをシグリーヴァは浮かべていた。

「瞬殺させて貰う。」

口から吐き出されるのは自身のマインドを刺激する。シグルドに成る、成りたい。その感情は身に纏う対魔の魔力が膨らむ事で感情が顕になっている。

トン……。ソッリユツ！

その空間からシグリーヴァが消え去る。ただの単なる移動である。しかし同じレベル6のヘディンの目にすらギリギリ残像が捉えられる程の速度はフォモールを完全に置き去った。

「瞬殺」その言葉、過剰なものでは無い。一撃一殺、対魔を持つシグリーヴァは魔石を弱点に持つモンスターにとって天敵となりうる。

軌跡は規則性が無くコマの様にクルクルと舞いモンスタアの天敵

でもある対魔の魔力を撒き散らしながら二刀にて塵殺して行く姿は二つ名にもある「剣王」の名に相応しい。

それから然程もかからず、49層の闘技場で動いている者はシグリーヴァ以外に居なくなつた。

何事にも相性というものは付き物だ。75年生きるヘデインは理解していた。しかしこれはダメだろう。団長であるオツタルがレベル7であるにも関わらず殺し切れなかつた軍団をレベル6がたつた1人で蹂躪するなど埒外が過ぎる。

英雄。長寿であるエルフのヘデインを描いてもその言葉が頭の片隅に出てきてしまうほどに。シグリーヴァはそう認識され始めていた。

文字通り格が違う。殆ど汚れが付いていない外套の汚れを叩きながら此方に手を振る彼女を見た。此方の考えなんか分かつてなさそうな顔を無性に叩きたい。ドロップアイテム位はちゃんと貰おうとシグリーヴァの下へと歩いて行つた。

誰かが原作開始と定めた年から2年前、気紛れなヴァルキリーに振り回された真面目メガネエルフの苦悩は今でも変わらず続いていた。いつかその苦悩から逃れられますように。あーそーめん。

## 主人公詳細

シグリーヴァ・ヘリア

種族：ヒューマン

年齢：25

身長：172

原作開始時レベル：6（レベルアップ保留中）

所属：フレイヤ・ファミリア

二つ名：剣王

容姿

紺の髪に銀のメッシュが入ったボブカットの女性。シグリーヴァ曰く着痩せする体型。顔はシグルドとブリュンヒルデを足してブリュンヒルデ寄りにした感じ(?)。顔面偏差値は高い。スカートよりズボンが似合うイケ女

基本アビリティ

力：S998 耐久：B729 器用：S940 敏捷：A85

5 魔力：SS1073

発展アビリティ

魔剣：C 剣士：E 拳打：E 治癒：H

魔法

【グラム】

・付与魔法

・対魔属性

・詠唱式【蒼天よ、墮ちろ。黄昏よ、来たれ】

(他スロット2つ空き)

スキル

【魔装】

・任意発動

・魔力消費に応じた任意ステータス上昇

・純魔力操作権

【戦王渴望】

・大成する

・渴望の続く限り効果継続

・理想を体现した時スキル消滅

【?位??】

・神の虚偽看破無効

・状態異常無効

・神への当スキル隠蔽

武装

【グラム】

背丈程の両刃長剣。刀身や持ち手はミスリルと強度上昇の為のアダマンタイトを混ぜて造られ芯鉄には竜の素材が使われている。椿・コルブランドの打った不壊属性の剣では耐え切れず現在はヘファイストスが打った一級品。不壊属性付き。素材全て持ち込みで1億ヴァリス

【フロツデイズ】

グラムが振れぬ狭い場所で扱う為の短剣群の総称。全てで5本用意されそれ全てグラムと同じくヘファイストス製。打ち出す為に柄頭は平に造られている。不壊属性

戦闘スタイル

基本的には中近距離を得意とする。魔力で身体強化して魔法を剣で切りながら物理で殴ってくる脳筋ヴァルキリー。方向性は少し違うがアイズの完全上位互換とも言える。技量があること、エインヘリヤルであることを鑑みると戦闘継続能力にかなり秀でていると言える。

必殺技

【禍津・黎明剣】  
ベルヴェルグ・グラム

本家リスペクト宣言。魔法全開で剣に過剰魔力供給を行い投擲と言う名前の射出を行う。それでも足りない場合は魔法を身体に付与して突っ込む。不壊属性では無いと魔力量に耐え切れず武器が崩壊する。御試し一発で不壊属性でも芯鉄が歪んだのには椿に文句を言われたがそれ相応の威力を發揮する。レベル6時には49階層のバ

ロールを一撃で仕留めた。

特別何かズルをしている訳ではなく本家を真似したいというトンデモ精神の下技量ありきで成し遂げている（レベル6に上がる為の偉業はコレ）

#### 服装

露出がほぼ無い本家リスペクト。マントを羽織り、伊達メガネを掛け、腰には短剣を提げてズボンを履く。ガッツリ手袋までしている。

## 神ヘステイアと神ヘファイストス

はいどうも、ヘデインの歳が77歳になったから原作もそろそろ始まるのかあとぼんやり朝ごはんを食べてるシグリーヴァさんだよお。

アイズちゃんがまだレベル5だし、神ヘステイアはこの前剣のメンテナンスに行ったら神ヘファイストスとお茶してたし。多分まだまだ。

神ヘステイアが私を勧誘しに来た時は面白かったなあ。

神アポロンよりもよっぽど太陽みたいな方だったのを良く覚えてる。個人主義の此処も悪くないけど、仲良くいい感じで過ごしたいならあの神様は凄いいい抛り所となるだろう。

だからこそ断りを入れると同時に、それが完全に心に決めたことでは無い事を伝えておく。

「当方は世話になっている場所がある。領く事は裏切りとなろう。しかし神ヘステイア、数度の遣り取りだけであれ貴殿の印象はとても良いものであるのも事実。私が路頭に迷った時は宿り木として頼っても良いだろうか。」

「うん！何時でも頼ってくれたまえ！」

うん、ちよつとシグルド味薄かったかな？でもこれが私の本心。だって良い神だもん。

「ヘステイア。この子はレベル6よ、大手の幹部だから諦めなさい。それに今この子が貴女のところに行ったら墮落するわよ？多分オリオ1・2の稼ぎでしょうし。」

現実是非情である。そりや神ヘファイストス自身に武器の整備させてる奴が低レベルなわけ無いけどさ！わざと言ってなかったのに言わなくていいじゃん！

そりや武器のメンテだけで7桁のヴァリスと必要な素材をヘファイストスにサラツと手渡してますけど。何か！

「ええー！シグリーヴァ君そうなのかい!？」

態とらしいけどこれが神ヘステイアである。純粹の中に母性が見

える。うーん大好きになりそう。

今更ながらこのシグリーヴァ、原作介入だの死亡キャラ救済だの興味は無いのだ。それはリユー・リオンが原作通りに「豊穡の女主人」で働いて居ることからも察せられる。

一貫して「シグルドに成りたい」というスタンスを崩すこと無く走り続けて来たのだ。今更変えられないし変えようとも思わない。

だが自分が成りたいのはシグルドの強さである。シグルド本人にはなりたくは無いのだ。あんな悲惨な最期は迎えたくないでござる。

個人的な連絡先を教えるくらいなら大丈夫でしょう。∴大丈夫だよね？

うん、神へステイアと繋がりが出来たし、大満足！帰ったら久しぶりに徒手空拳の鍛錬でもするかな。グラムもフロツデイズも預けちゃったし。

「へステイア、もつとちゃんとファミリアの幹部の顔と名前位は覚えなさい？」

「ん？なんでそんな怖い顔をするんだい。シグリーヴァ君はいい子だったじゃないか。」

「あの子がフレイヤ・ファミリアの所属だからよ。」

「えーで、でもやんわりとした返答だったじゃないか。良い子だよあの子は。」

「否定はしないわ。だけれど、あの子がフレイヤのお気に入りであることは事実よ。」

「うーん、僕にはあの子が仲良くしたそうにしか見えなかったけどな。」

へステイアは手元にある紙切れに目を落とす。

ご丁寧にフレイヤ・ファミリアの住所とシグリーヴァ・ヘリアという名前が書かれただけのソレ。だけれど、これが今後原作を少しずつ変えていく事になるとはシグリーヴァは考えて居なかった。ただの

ポンコツである。

ミアさんは母親じゃないけどミア母さんと呼びたくなる。

無性にファミリアのご飯じゃなくて外のご飯食べたくなる時がある。みんなも無い？家で乾麺茹でてうどん食べるくらいならちよつと自転車で10分位の離れた大衆チェーンに行つて600円でも1000円でも払つてうどん1杯食べたい瞬間。私はあつた。

丸腰で夕方のオラリオの空を見上げながら一人で散策する。

女が丸腰で出歩くなど言われればその通りなのだが。例え完全武装した同僚の猫やロキ・ファミリアのアマゾネス姉妹が突つかかつてきてもボコせる自信があるからに他ならない。

「戦士の王」とは獲物が手元に無ければ敗北するのか。違うだろう。故に我流ではあるが知識の中に根強く残るマジカル☆八極拳を再現してみた。似非であり、体系化すら出来ていないが「禍津・黎明剣」にも使われている寸勁はゴライアスを体内から爆散させ、ウダイオスの肋骨を問答無用で粉碎した実績を持つ。

それに加えて「剣王」としての知名度。オラリオ最強の剣士としての名と容姿は嫌でも有名にならざるを得ない。それは逆に言えば実力の裏付けと抑止に繋がってくれている。

長々とどうでもいいことを脳内で早口で喋つたけど、どこ行くんだつて？え、気になるの？

：そうかそうか。ではお答えしよう！私が今夜の夜ご飯を食べるお店！じゃーん！「豊穰の女主人」！早速入ってみましょうね。

頼もー！！！！

「此処は食事処さね！誰だ！道場破りは！」

おつとー？私じゃなきや死んでますよその拳。

がつつちりと振り下ろされた拳を片手で受け止める。ミアと同等以上に成長した筋力を以ってしてもギリギリだったが無事受け止めきれた様だ。安心。床とか砕いたら請求来そうだしね。

「あんたの掛け声は喧嘩売ってる時のやつだよ全く。何の用だいシグリーヴァ。」

ミア母さんの飯を食べに来たに決まってるでしょーが！それ以外に此処には来ないよ。…来ないからね？

「前の看板が支度中なのが見えなかったかい！…たく、アーニヤ！下準備は終わってるかい!？」

「ニヤー!!開店前に来るとか巫山戯るにやこの剣狂い!」

「私が聞いているのは此奴への文句じゃないよ!」

「ウニヤー!終わってる!終わってるニヤー!」

うん、騒がしい。でも嫌いじゃない。ニコニコとカウンターに座って彼女達の戯れを眺めて居るシグリーヴァは他人事。アーニヤは今度殴ると決意固めた様子。

「それで?何食べるんだい」

そりやお任せに決まってるでしょう。あ、冷えたエール頂戴。ンー、5000ヴァリスあれば足りるでしょ。酒の肴2。3品とメイン1皿!余ったらチップね!

「はいはい、お残しは厳禁だからね!」

委細承知。ウンウンと頷いて肯定する。美味しいものを残すなんて馬鹿な事はしないよ。

彼女達が慌しく準備している姿を肴にエールがぶ飲みしていれば、一人すすす、と横に寄ってきた。

「シグリーヴァさん、お疲れ様です。」

ああ、シル・フローヴァ。ん、識っている身だからか彼女との付き合い方も如何せん悩んでしまうと言うもの。だからなんにも言葉に出さずグラスを掲げるだけに留めた。

「ほら、出来たよ。ポセイドン・ファミリアから届いた海老のクリーム

焼きとデメテル・ファミアから卸した野菜と肉のミニミルフィュー鍋。メインはちよつと待つときな。」

シルが口を開こうとしたタイミングで丁度料理が来たから完全に前向いて食べ始めたけど怖いなー。後ろ向かんとこ。

海老でっか。オマール海老の一回りはデカいぞこれ。ホワイトソースに焦げたチーズが上にかかっているの反則だろ。

んー、やつぱり日本人には醤油だよな！厳密に言えば醬の上澄みらしいけどここでしか補給出来ないジャパニーズソウルは心の癒し。白菜みたいな野菜に豚肉みたいなお肉。酒、醬、鷹の爪。塩に柚子胡椒とシンプルな材料に関わらず酒の肴として機能している。ピリ辛な一人用鍋にはエールが止まんない。

ふたつが綺麗に食べ終わった頃、ドンツと置かれたのは山盛りのナポリタン。これぞ「豊穣の女主人」という一皿。1500ヴァリスする値段に見合うミア母さんのお手製は、周囲の席が賑わってきた頃に完全にシグリーヴァの胃の中に収まっていた。

デユエ…原作開始iiiiiiii!!!

【悲報】癒し枠だった神へステイアが神へファイストスのヒモじゃないなくなった。

早い早い早い原作始まるの早いつて。ピカピカになったグラムとフロツデイズに大満足になりながら聞いたら眷属作ったって…おうのう…餌付けもまだ満足に出来てないのに…（ミア母さん特製チャーハン持ってきたやつ）

ご飯渡したいから居る場所教えてって言ったらすんごい顔された。良いじゃん神様餌付けして懐かせたって。ペットじゃないんだからダメ？えー餌付けしたい！

はい、という訳で廃墟チックな教会にきてまーす。雨漏り凄そうだし地下が無かったら神へファイストスに私から小言という名前の苦情が行ってただろう。

今は昼前、タツパーとかそんな便利なお皿は無いため、フレイヤ・ファミリアからちよつと割れにくそうな木のお皿拝借してきました。持ち帰りなんてやってないと文句言いながら金払ったらやってくれるミア母さん優しいねえ。

ちなみに私のお昼ご飯はミア母さん…じゃ無くてリユースさん特製のサンドイッチです。いや、リユースさんが作っただけで普通に通常メニューに載ってるやつだからね？それにちよつとコイン上乗せして紙で包んでもらったただけだから。うん。一生懸命作ってるリユースんかわよかった。

押したら勝手に開きそうな扉コンコン。あれ？これトイレだっけ？

「はい。ちよつと待ってておくれよ。」

なんにも言わずに出てきてくれたからヨシ！

初眷属祝いにはなり得ないかとは思いますが美味しいお昼ご飯を

持って来ました。良かったら食べてくださいね。あ、替えの容器あったら：あ、無い。分かりました。明日取りに来ますね？

「ほんとかい！ありがとうねシグリーヴァ君！ベル君にも食べさせるよ！」

うん、ぴよんぴよん跳ねてそのデカいたわわを謎の紐に引っ掛けながら揺らすの目に悪いから辞めて、やめて。貴女はマスコット枠なのよ。いや、でも癒しだな。持ってきて良かったあ。

で、そのベルクン？グルクン？眷属の子かな？

「ベル・クラネルって子だよ。君は君にも付けてるだろう。そうだよ、僕の初めての子さ。」

うーんやっぱり母性を感じる。良いっすねえ…。機会があればベル君にも会ってみたいな。ヒモニートランドマザー神へステイアのお人好しレベルの善性を確り見抜いたんやろな（はなほじ）

「そういえば、ヘファイストスから聞いたよ。君、フレイヤの所の子供なんだって？」

うーすそうでーす。ガネーシャとかイシユタルは求めるものが根本的に違ってたし、個人的には微妙だったけどフレイヤ本人から良くも悪くも熱烈なラブコールをもらいました。

要らない。要らない…。そりや女の子好きだけど。感性前世のまだから男とは結婚あんまり考えられないけど！

アレ（原作）知っちゃったら悩むよねえ普通。

それでも直接話せば知っていること以外に色々出てくるのは当然で。他の所も色々見て回ったけど運営方針が個人的に気に入ったので今のところお世話になってるって感じでやんす。

「なるほどね。君がフレイヤの眷属らしからぬ価値観を持つてるってヘファイストスも椿君も言ってたから不思議に思ってたんだ。直接聞けてよかったよ。」

うっすうっす。じゃ私はこの辺で。また来ます。ちなみにそのベル君は何処へ？顔だけでも見ときたいかな？

「ベル君はダンジョンに行ってるよ。多分1か2か3層か。うん、君なら心配ないと思うけど気を付けて。また来るんだよ！シグリーヴァ君なら大歓迎さ！」

うーん元気が良くて居らっしゃる。そしてこの善性。その爪の垢を煎じてフレイヤに吞ませたい（物理）

さて、久しぶりに初心者のお気持ちを体験してみますか！

拳ですら過剰だから気を付けてね。そんな天からの電波は残念ながらシグリーヴァには届いていなかった。

この兎君が半年後にはレベル5に上がってるなんて信じられない。チートやチーターやビーターや！

流れる様に脚がダンジョンの入口へと向かう。10年間通って居るのだ、今更迷う様なことも無い。

オラリオに来たのが15歳。今25歳。

未だ頂きには届かず。されど、いつか追い付く。その執念染みた思いは今も変わらない。

凄く懐かしい記憶が浮かんで来たけどなんでだろうね。多分ベル・クラネルの顔を見に行くからだけ。

平均1・6年。それが私のレベルアップにかかる期間である。今は意図的にレベルアップを止めて基礎アビリティ上げと発展アビリティの方向性を考えながら高めている。

闇雲に強さを求めていたレベル4時代。なまじ力が付いてしまったが故の迷走期間。レベルが上がるまでの期間は1年を切る勢いであり喜んだものだが…。発展アビリティが1つも出なかつたのである。あれだけ「戦いの野」に通い詰め同格をフルボッコに出来るまで成長したにも関わらずである。

自分に向き合う時だった。TSという歪みを抱えながら自分の鏡である恩恵と向き合い闇雲に武器を振る事は辞めた。

誰にでもそんな時期はあるだろう。だからこそ、それを乗り越え折り合いを付けたシグリーヴァはこんな性格になったのだ。

さて、ベル君を探そう。

新品同然のメイン武装を背中と腰に携えて、1層から順繰りに練り歩く。

レベル6、それもレベル7になれることが確約されているこの身では、徒手空拳ですら過剰戦力。故に右手だけ、左手だけ、最後の方には人差し指だけ。なんて縛りを課しながら魔石を一撃で爆散させる通り魔的存在が誕生してしまった。

こんな魔石拾うの面倒臭いし他人に取られるの癪だから破壊し

ちやえばええんや！（本人談）

お、居た。あの子かな？うん、そのまんま。真つ白な髪に真つ赤な瞳。小柄な身体は異性である自分より低く、これは可愛がりたくなるやつだ。

精一杯短剣を振りモンスターを危なげ無く倒して一息をつく。そんな初心者に微笑ましく思いながらも内心戦慄した。

アレが半年でレベル5まで駆け上がる化け物かあ…と。

当たり前だ、主人公君である。そんなちんたら10年も20年もかけて強くなるのを書いていたら書き終わる前に作者が死ぬ。

だけれど、そう文字や言葉でサラツと流せるのは完全に他人事だからである。

そして、これはシグリーヴァにとつての現実である。

頭の中に居る三等身位の人形みたいなシグリーヴァと某剣世界のキバオウさんが言葉を揃えて騒ぎ始めた。ビーターチーターと。

それを言ってしまうえば私もそうなのだけれど。

久しぶりに他人に思考が振り回されている。辞めた筈の焦りがゆつくりと脳内を支配する。矢張り切り札を増やすべきか。

2年前、武装を一新してから溜まる一方で使ってなかった貯蓄を切り崩す覚悟を持って、地上へと戻った。

頼る先はフレイヤ。あんな神だけれど、持つ影響力は随一だ。お気に入りの中の自分が確りお金払ってお願ひすれば大抵の事は聞いてくれるだろう。

「さうして、避けてたけど魔導書に手出しますか。」

神フレイヤは嫉妬する。

ドーモ、神フレイヤサン。シグリーヴァ、デス。

「あら、呼んでも居ないのに来てくれたのは何時ぶりかしら？ いらつしやい、シグリーヴァ。」

はい、我が主神フレイヤ様ですどーもお。何時ぶりだろうね、多分前にステータス更新の日だったから半年はたつてないと思うけど。

まあ呼ばれたら来るんだしええやん。それで用事だけど、神フレイヤのコネと時間借りたいなあ。

「ふうん、それで、何が欲しいのかしら？」

魔導書。ベル君にあげてたあんたなら手に入れるコネあるやろ？

「そうね、手に入るわ。貴女からのお願いだし：5000万、それと一日貴女の時間を頂戴。それで最上のもを取寄せてあげる。」

ありがてー。取り敢えず1億持つてきたけど半額になってくれた。良かった良かった。

「貴女を変える出会いがあったかしら？」

レベルを上げる事を決意する位には。

即現金でどさどさ5000万ヴァリス出してくるシグリーヴァ。微笑みながらそんな事を聞いてくるフレイヤには、顔すら上げずお金を数えながら答えた。

2、3日待てば届くと言われ、サクツと退散して5000万ヴァリスを元の貯蓄場所に戻しに行った彼女を思い浮かべながらフレイヤは頭を回す。

シグリーヴァが交友の幅を広げたのはヘファイストス経由。ヘファイストスのヒモだったヘステティアと仲良くなりあの子の眷属の子も気に掛けている様子。

「私よりも余っ程気に入ったのね、ヘステティアの事が。」

シグリーヴァのフレイヤ・ファミリアの加入は少し異例であった。

10年前。ロキと一緒に黒竜に敗れたヘラとゼウスを蹴落としてオラリオの頂点に君臨してから5年が経とうと言う時期。

15歳のシグリーヴァにフレイヤは出会って：欲しいと思っ  
てしまった。オラリオの外から来たというが、その目は未知と既知を反復  
横跳びしていたのは今でも覚えている。

太極のような綺麗な丸では無い。白と黒が混沌と渦巻く魂。だけ  
れど、一つの芯を持つ可能性を秘めた惹かれるものであった。何れ大  
きな。誰にも崩せぬ太極に育つ原石を、私は見つけたのだ。

幸い私が誘うまで誰も勧誘をしていなかったようだ。其の儘、誘っ  
た。告白の様な言葉を使ったかもしれない。向こうが入れて欲しい  
と乞うのでは無い。入って欲しいとフレイヤ自身がお願ひしたのだ。  
そうして、シグリーヴァは眷属となった。最初から発現している魔  
法には見覚えのある文字があるしスキルも大概だった。

所謂レアスキル、レア魔法。アンチ魔力の魔法などウィザードから  
して見れば地獄の様な魔法だろう。

それに、彼女には魅了が効かなかった。何故、とは分からない。本  
人に聞いたが分かっていない様子。嘘は言っていないからそう  
なんだろうけど。

あの子を変えたのが私じゃないのはとても気に食わないけど。私  
もあの兎さんが欲しいから：お互い様ね。

さて、あの子との一日、何時にしようかしら。モンスター・フィリ  
アは先約が入ってるし、先延ばしにしましょうか。

## レベル7とおNewな魔法

はいみんなこんシグ〜！アイドル冒険者のシグリーヴァ・ヘリアだよー。シグリーヴァは〜、今日も〜最強〜！

はい、というわけでね（—）スン…

ついに！

念願の！

魔導書が！

どどいたー！

お前を待ってたんだぜえ？（ゲス顔）

うん、ダメだ、興奮してる。

徒手◎

剣術◎

魔法…魔法？あれが？

こんな状態がついに解決するのである。

「グラム」を魔法とは認めん。エンチャントじゃんあれ。

お礼の一言だけ言って神フレイヤから魔導書受け取れば自室の入口に鍵をかけて引き籠った。

さて、題名はと。

「虻でも理解出来る魔法の絵本」

うん、原作知らなかったらグラム突き立ててるよ。魔法で塵にしていたよ。どっかの骸骨が主人公のメイド思い出したよ。びっくりした

——ペらり

ちゆうい

- ・まほうはけんとおなじくあぶないよ
- ・まほうをつかうためのばわーはきみももってるよ
- ・なんにもかんがえずにつかうとたおれちゃうよ
- ・たよりすぎはよくないよ

…ごめんな、ちゃんとしたこと書いてあるじゃん…ゆるして…誰かわかんない作者さん…

———ぺらり

『さて、始めるとしようか——私』

うん、そうしよう。この為に金払ってフレイヤに一日を売っぱらったんだ。ちゃんとしたものじゃなきゃ困る。

『魔法とは何?』

決まってる、万能だ。魔術じゃないんだ、反則なんてありやしない。未来視過去視現在視でも持つてこい。

『魔法とはどんなもの?』

0を1に。不可能を可能にひっくり返す一つの手段。今更特別視するわけじゃない。だけれど、奥の手を持つておくのが英雄だろう? 『魔法に何を求める?』

可能性だ。「禍津・黎明剣」は一撃でバロールを消し飛ばした。だけれど既知を組み合わせた技術だ。シグリーヴァ・ヘリアとしての業そのものだ。だからこそ、…「シグリーヴァ」が持つもの以外の可能性が欲しい

『魔法に何を望む?』

ジャイアントキリング。ついでに格下絶対殺すマン。万能なんて言わないからとつと私の欲しい力を寄越せ『私』

『我儘だね?』

万能を望んでないんだから我儘じゃねえだろ? 万能を望んでやろうか? どうせ火力下がるんだだろうが。

『ハハッ、流石。分かってるじゃん。』

どんだけ知識詰め込んだと思ってるじゃこちとらwiki読破しとるんやぞ。

『それでこそ当方だ。』

そうだな。

自分と語り合うという既知の癖に不思議な体験をした私の脳ミソは意識をシャットダウンさせた。

起きた！

真っ白な「虻でも理解出来る魔法の絵本」だった冊子に突っ伏して寝てたから肩痛い、首痛い。

どーして自動的に布団に移動してくれないんですかねえ私の身体……？

…。  
昼前に受け取ってそのまま寝て…あ、お昼ご飯食べ損ねちゃったあ

まだ空が赤らんでないから普通に昼過ぎかおやつ時間だろう。

そんなことはどうでも良い。主神であるフレイヤには起きたら向かいますと伝えてある。一直線に向かうのは勿論神の部屋。

頼もー！！！！

学習しない子である。

「ふふ、ご機嫌ね。」

そりやそう！今なら神フレイヤにキス位なら出来ちゃうよ！

「ならして貰おうかしら」

お易い御用で。はい、額にちゅー♡

ほら、オツタル出た出た。ステータス更新とランクアップ終わらせちゃうんだから。…終わったらヤろうね？ほら、嫉妬しないで？

「……………分かった。…楽しみにしているぞ。」

さて、さて、さて。上着も肌着も脱ぎ捨てれば身長に見合う豊満な胸がこぼれる。うん、服着てる時より大きく見える。実際には変わってないから不思議だよねえ。

下脱がないのって？SEXしに来たんじゃないんだよ！おら！ラ

ンクアップするんだよ！

「分かってるわよ。…私との触れ合いを嫌がるなんてシグリーヴァ位よ?」

今はそんな気分じゃないし気分だったとしてもあんたは主神以上でも以下でも無いじゃん。

「そうね。でもそんな貴女が欲しいのよ?」

生真面目メガネエルフにでも言ってみてあげな?

「……………はあ。今回は見逃してあげる。頑張ったかいがあったみたいね。今回も発展アビリティ、ちゃんと発現してるわよ。『破碎』ね。それに、魔法。」

うっし!

神から紙が手渡される。おー、綺麗さっぱりI/Oが並ぶのいい感じ。ランクが上がるの毎回アツサリしてる割に、上がり幅デカイよね。

背中に乗って背中触ってる神を放っておいて、記載を確認して行く。

神フレイヤが言う通り発展アビリティには『破碎』が追加されていた。打撃系統攻撃の補助的な立ち位置のそれは意図してシグリーヴァが取得したものである。

そして魔法だ。

【クル・パキア】

・領域魔法

・領域内の空間掌握権

・魔力消費は領域の広さと継続時間に依存

・詠唱式【空を超え、今を駆ける燈よ。潰えることは赦されぬ。抗い歯向きその威を示さんとするならば、高らかに我がサガを詠いあげよ。我が煌めき、剣の瞬き尽きる事無し】

おっと…そう来たか『私』。攻撃魔法じゃ無いのは少し予想外だっ

たが書いてある事が本当ならばかなり強いぞこれ。

ただ怖いのが魔力消費量。普通に今まで燃費の良い【グラム】と【魔法】を好き勝手使っていた為にここに来て初めてのちゃんとした魔法。

意図的に使えばレベル8に上がる時は「魔導」の発展アビリティが貰えるだろうが……。今はそんなものは無いのだ。オツタルで試すしか無い。

ワクワクと一緒に態度に似合わずちよつと不安になってきたシグリーヴァであった。

## 魔法と世話焼きオツタルさん（32歳）

お待ちーどう！おろ、態々人集めたの？目立ちたがり屋？

「否、見取り稽古もたまには必要であろう。」

そう言われてみればレベル4以下の洗礼組しか居ないや。そうかそうか。じゃあ速度落とそうか。

「当然だな、我等がぶつかるには此処は狭過ぎる。」

せっかくだし魔法も使いたいなあ。あ、攻撃魔法じゃ無かったから安心してね？ガチだよ？ガチの初めて使うからね？

「攻撃魔法では無いなら問題無いだろう。だがレベルが上がった直後だ。制御を手放すなよ」

うつつオツタルパイセンリよーかいしやした！

周りのザワザワが大きくなる。私がランクアップしたこと言っくなかったんかい。まあ良いや

『空を超え、今を駆ける燈よ。潰えることは赦されぬ。抗い齒向きその威を示さんとするならば、高らかに我がサガを詠いあげよ。我が煌めき、剣の瞬き尽きる事無し』——クル・パキア』

「…む。」

あー、あー、なんだこれ。気持ち悪っ。指定した範囲の情報リアルタイムで全部頭ん中に流れ込んで来るのキツツ!!

もしかしてSAN値がピンチ??失敗したら発狂するんか？

あー、なるほどね。一人で納得してるのやめいと言われそうだけど、文字だけじゃ分からんわこんなもん。

空間把握だけならこんな座標情報なんか要らないし魔力消費が多過ぎるんだよ。

レベル7の魔力量舐めんな？それが常時ヤスリで削り落とされていく様な感覚になるのはやべえんだよな

「掌握」とは。自分の思い通りにすること、全面的に自分の支配下に置くことの意味。

だから指定した空間内は自分のものというわけで。こうしてオツタルアニキの背後を転移という形で取れるのも必然的だった。

空間の揺らぎも無く目視の確認も必要無い。意のままにその空間を支配していた。

「凄まじいな。」

いや、そうだね。多分ほんと万能レベルでなんでも出来るだろうけど脳ミソの負担がデカすぎる。それに魔力消費がえげつない。「グラム」の併用も出来なさそうだしほんま切り札って感じ。レベル2・3の時に発現したら発狂して使用封印してるよ。

流石我儘な『私』こりゃ切り札になるわ。格下に負ける要素ほぼ無いし格上も引き込めればワンチャンある。結界みたいに空間を区切れないから閉じ込められないデメリットはあるけど、十分だ。

よし、大体わかったからやめやめ。頭痛くなつて来た。みんなありがとね、じゃ、組手やりますか。

「受けよう。」

レベル3相当の速度からゆっくりとギアを上げてゆく。上昇し過ぎて意識と身体の感覚の乖離を戻して行く様に。不安定な段階で武器は振れない。身体の強度を確かめるようにわざと拳を受けたり、防御したりを繰り返しながら腹を殴り合う。

じつくりと付き合ってくれたから調整も上手く済み、最終的にはレベル6相当までギアを上げ、互いに余裕を持ちながら演武の様なそれは終了した。

いやーダンジョンでモンスター相手にヒヤッハーするのも良いけどね。誰かに手伝って貰った方が細かい調整が出来る。

徒手の調整が終わったから今度は武器の調整も兼ねて何処かの階層主を：とも考えたが、思い出してしまった。ロキ・ファミリアが遠征から昨日帰ってきた事を。

居ないじゃん階層主……。萎えた。萎えぼよでござる。

今日はゆっくりして、ミア母さんにランクアップの報告でもするかな。美味しいご飯つくつてもーらお！

## 聖地巡礼ならぬ原作イベント巡礼

「やあ、少年。精が出るね。」

防具も無く、安い短剣一本で必死にモンスターと戦う白い兎。白い髪が自分の血と土で汚しながら戦うその姿。レベル1、それも駆け出し。瞳の奥に灯る激情は黙って見守るには熱すぎた。

故について、声が出た。

兎君がビクツツとして此方を振り向いたのを見て、可愛いなあ、と庇護欲が膨らんだのは秘密である。

さて、どうしてそんな事になっているのであろうか。ベル君にはアイズが居れば、シルやリユウが居ればそれで良いだろうに。

オツタルとの組み手というレベル4以下の子達に見せる為の見世物が終わった後、お腹ぺこぺこ丸なシグリーヴァちゃんの手にはパンとスムージーが握られていた。

昼前から部屋に籠もり、出てきたと思えばステータス更新を強請る。そうして終わったらお腹ぺこなのを無視してオツタルの所へと向かった。

うーん自業自得。パンもスムージーも美味しいけどこれは空きっ腹を紛らわすものに過ぎない。

腰に短剣を提げ、グラムはお留守番。もう夜だし出かけるとしますかー。

ランクアップはギルドに報告する義務があるが、そんな所よりも先に報告する場所がある。

ミア母さんである。

なんといってもあの人こそシグリーヴァの拳士としての師匠であつた。

勝手に師匠と呼んでいた時期があっただけだし、技術を教えて貰うとかは一切無かった。だってミア母さん自身が武に秀でた人ではなかったから。

圧倒的な腕力による暴力。それがミア母さんである。

教わったのは拳の握り方から殴る場所、それから心構え。実際この教えがあつたから色々と割り切れた部分もあり、感謝しかないのだ。剣しか振ってなかったレベル2時代。あれ？もしか、このまま行くとシングルじゃない道に進む事になる…？と。

一抹の不安を抱いた自分が起こした行動とはそう、神フレイヤに泣き付くことであつた。

情けないと思うだろうか。今では似非マジカル☆八極拳を使っている身が誰かに師事しようとしていたのは。

神フレイヤの思う最強の腕力として紹介されたのがミアであつた。そりやそうだ、元フレイヤ・ファミリア団長だもん。

フレイヤ本人すらぶん殴る暴君。神フレイヤの紹介は間違つていなかった。

だって、もつと自由で良いと気が付いたのだから。型破り型無しとはまた違う、ひとつの形。

もつと我儘で、もつと自由であれ。目指すところが定まっているならば「恩恵」は確りと応えてくれるから、と。

今思えばレベル4の時も相談すれば良かったかな。行き詰まつて我武者羅に何でもやつてたし。

あー、うん。やめやめ。感謝を込めてお酒でも買ってこう。魔導書分が浮いたしね。

どの世界でも酒の値段はピンキリである。法外な値段で取引される様なものは持っていかないけれど、ミア母さんのコレクションに入る様な。…大体50万ヴァリスのこれ良さそう！はーい店員さん、これこれ。ちゃんと教えてねー！包装？サービス？よし来たお願いしやーす！

もう夜。空には星が煌めき居酒屋はわいのわいのと煩いくらいに繁盛している。

豊穰の女主人は、つと。お、今日は団体さん入りか。忙しそうだねえ。

コソコソつと気配薄めて入れれば、カウンターが1席空いてるじゃないか！

リユーちゃん、エール1杯とおつまみ2皿くーださい。あとミア母さん呼んでもらっても？

丁度通り掛かったウェイターはエルフのリユーちゃん。いきなり現れたように見えたのだろう。びっくりしてる顔が可愛かった。

「なんだい、忙しいんだから後にしな！」

ちよいちよいつと飲んだら帰るからね。はい、日頃の感謝。コレクシヨンに入るくらいはやつだよ。……ミア母さん、ランクアップしたよ。レベル7になった。ギルドより先に教えたかった。それだけ。久しぶりに色々話したいから、明日の午前中にでも時間作ってくれたら有難いな？

「気が利くじゃないかい。こんなもん貰っちゃ時間作らないわけにもいかないね。…そうかい、上がったかい。満足して無さそうだね」

いーのいーの。漸くミア母さんを抜けたけど、頭は上がらないからね。…うん。通過点だよ。私はこんな所で止まらない。

背後でロキ・ファミアがどんちゃん騒ぎをおこしてリヴェリアのおっぱいを賭けてなんちゃらと聞こえてくる。そんな中での数回のやり取りであったが、本当の母親との会話の様に身体に染み渡る。

一時の嬉しさと一緒にエールで喉を洗う。今日のおつまみは…と。カリカリに焼かれたバゲットにアボカドやら生ハムやら乗っけてあるやつか。オシャレだねえ。小さいから数が多くて助かるや。

こっちは、ローストポークかな？絶妙な火入れが最高の赤身肉。塩と胡椒、粒マスタードのソースが美味いんだこれ。

軽く飲んで帰るの言葉を忘れてエールお代わり！って言ってしまうのは不可抗力だろう。

「…ああ、アイズ聞かせてやれよ。あのトマト野郎の話」

二杯目グビつと行こうとした時、通りの良い声でそう聞こえてしまえば：空気が下がった。

あー、今日なのか。今日だったか。浮かれて忘れてたよ。

当事者間で解決してないようなコトを酒の肴にしようとしているのは悪質だ。

さらに言葉を重ね、酒の勢いで告白紛いの言葉を吐き出している姿にはくすりと笑ってしまった。

「男の俺」と「女の私」が居る感性だ。狼君の気持ちも分かるし、あんな男と番になるのは御免だね〜とちよつと気分が悪い私も共存しているのだ

うん、複雑。兎君が飛び出して行っちゃったし：神ヘステイアのご飯代だと思つて払つておこうかな。

アーニヤ、兎君分は私が持つよ。うん、うん。じゃあコレを。あとちよつと小言だけ言つて帰るからそれだけ宜しくね？

「にゃー。ミア母さんに殴られないようにしにゃ〜？」

分かつてる、わかつてる。さて、——神ロキ。

酒場から音が消える。レベル7の存在感、抑えていたそれを解放し器用にもロキ・ファミリアだけに殺気混じりの闘志をぶつけているだけである。

大きな声では無い。ミア母さんには迷惑は掛けたくないのだ。

「なんや、居たんかシグリーヴァ」

居たとも。少しミア母さんに報告と贈り物があつてね。少し飲んで帰ろうとした所でコレか。……ミア母さんの店じゃ無きや見逃してたけど、弱い者虐めしてお酒が飲めるファミリアは此処には通つて欲しくないなあ？

「なんやて？…喧嘩売つとるんか」

喧嘩買いたかつたらいいけど。君達とは違うから言葉で諭してるだけだよ。こんな話を今後もするなら今すぐ二次会に行つて欲しいんだけど。

やつても良いんだよ？昨日か一昨日のミノタウロスの件。十分ギ

ルドからのペナルティ案件だしギルドに私と被害者の会でロキ・ファミリアにペナルティをつけてノイマンに圧力かけるの。

―― 剣王とロキ・ファミリア!?

―― なんだなんだ

―― やれ! やつちまえ!

周囲もこの対立構造にザワザワと騒ぎ出してしまった。さっさと終わらせないとね

「シグリーヴァ・ヘリア」

なあに? レベル5程度の幹部も御しきれない人工勇者君?

「ほんま喧嘩買ってやろうか?」

「ロキ、買ったなら終わりだよ。…言う通りだ。僕が確りと手綱を握れてなかったせいだ。謝罪する。」

まあ安牌な対応だね。私に謝罪するんじゃない、ミア母さんに謝つて。…あと、確り調教するんだね。モンスター・フィリアでもガネーシャ・ファミリアがやってただろう?

「忠告を噛み締めるとするよ。」

「ダメエ聞いてりや——ッ!」

はいはい。ヨイショツとお!!!

ベートの上段蹴りを余裕を持って避けながら鳩尾に肘。流れる様に金的い! 外にしゅートう!! レベル差が2つあればこんなものである。うん、破損無し、怪我人なし。上出来だね!

「なあにが上出来だこのアホンダラ!!!」

バッチコーン! と漫画の様な音がシグリーヴァの頭から響きミアの不意打ちの拳に撃沈させられた。解せぬ○

ちゃんと迷惑料金を払って、そそくさと店を出てダンジョンへ向かったシグリーヴァであった。

「フィン、良かったんか? あれだけ啖呵を切られた相手にそんなんで。」

「未確認のモンスターと対峙した時以上に親指が痛かった。それだけだよ。…丸腰同然で酒も入ってるんだ、勝ち目は無かった。」

「そんなにか？」

「新しいスキルか、：最悪レベル7だ。前は見えてた勝ち筋が勝ち筋に見えなくなってる。」

「マジかあ：：フレイヤの奴にまた突き放されたやんけ」

「嘆いてても仕方ない。僕達も成長している。遠征からも帰って来て恩恵を更新しただろ？」

「そうやね」

シグリーヴァよりも迷惑料を多く支払ったロキとフィンの会話であつた。

お節介、それは憧憬の邪魔にならない程度に。

はい、とりあえず壁を拳で粉碎して兎君とお話する時間を作ったシグリーヴァちゃん御座いますよー。

「えつと、…貴女は…？」

神ヘスティアの所のベルクンだよー、知ってるよ。シグリーヴァ。名前は聞いた事あるんじゃないかな？

「あー神様がしよつちゆう話してた！」

そうそう。神ヘスティアをお世話してます。ちよつとね、見掛けだから付いてきてみたの。

原作に首突っ込む気にもならないしお師匠様ポジに成り代わりたとかそんな欲欠片も無いけどさあ。…構いたくならん？

主人公パワーなのかな？まあ知らないけどさ。こんなふわつとした気持ちだけど、教えられる事が無いわけじゃない。

原作を覚えている限り遡ったけれど、身体の使い方や駆け引きはちゃんと学んでる癖に短剣を扱う技は学んでいる描写が無かった。

勿体ないよ。持ち方、扱い方。いずれ神ヘファイストス製の短剣が主装備になるんだから、は言い訳でしかない。

だからそんな技とかは教えられ無いけど、ちゃんとした持ち方と力の入れ具合だけは教えてあげる。

「…お願いしますー」

いい返事。じゃあね、ほら、こう持つて？小指と薬指に力軽く入れて、あとの3本は軽く方向性だけ定める感じで。

そうそう。逆手の時はこう。投擲は…うん、まだいいか。覚える事多いけど基礎だからね。意識しなくてもこれが出るように。

「あの、…僕は強くなれますか？」

んー、絶対とは言えないけど、上を見ているうちは絶対成長するよ。下見始めたら恩恵もそれに応じて急速に成長しなくなる。気を付けてね。目標があれば尚よしだ。

「ありがとうございます…。頑張りますね！」

よしよし、それじゃあ帰ろうか。ちゃんと夜は寝て昼間頑張ること。そうしないと体が持たないぞ？

と言う訳で夜帰りでございー。神へステイア起きてますか？お土産は無いけどグルクンベル君をお届けに来ましたよー！

「シグリーヴァ君！それにベル君どうしたんだいそんな！」

いやー、普段着短剣一本でダンジョンに行ってたんだけどね。無理はしてないから大丈夫だよ。見た目はちよつとグロッキー感あるけど。普通に怪我は切り傷位だし。

「シグリーヴァさん、ありがとうございます。」

いーえ、無問題で御座いますよ。それじゃこの辺で。神へステイアも、兎くんもちゃんと寝るんだぞ？

師匠みたいな真似事してみたけど難しいや。いやね、自分の技術そのまま教えて大丈夫ならいいんだよ。

だけどね、ほんと細かい部分。自分なりにアレンジしたり微調整してる部分はそうもいかない。

例えばが難しいな、ピアノ、そうだ、ピアノで行こうか。私の前世じゃ片手演奏が出来るくらいしか上達せずに投げ出していたけれど。いじやないか動く方が楽しかったんだから。

男が男らしい曲を女性の弾き方を参考に弾いていたらどう映るだろうか。そう、違和感が凄いのだ。

知識がない人、興味ない人にとってはこちらと弾けている点だけで上手いと判断されるであろう。だけれど、細部が分かる人を見るとどうだろうか。

戦いも同じことだ。誰かを真似るのは勿論良い。ちゃんと見ていると言うことだから。でも、それは上位には通用しない。

武器も体格も恩恵も癖も何もかも違うのに同じ動きをトレースしようとするのが間違っている。

上に上り詰めるのならば…小難しいとは思うけれど、自分なりのものを見つけてそれを極めて欲しいかな。

ぶらぶらと半分酔いが回った頭で変なことを考えながらシグリー  
ヴアは帰路に就いた。

「ベル君、良く聞くんた。シグリーヴア君はレベル6でフレイヤ・ファ  
ミリア所属だからね？」  
「え、ええええええ!!」

神の宴、その中心で神はパーリナイ！と叫ぶ

「ガネーシャさんマジパネエっす」

「俺だったら絶対入口ケツの穴にするわ」

静かになるなんて思考が無い神の神達による神の為の「宴」

宴を開きたい神が事前告知も無く開き、何処からともなくその騒ぎに乗じて集まる。

そう、神とはフリーダムであり、そして宴が大好きなのである。

貧乏神と言われる零細ファミリアの主神にとっても同じこと。

タダ飯が出るといっただけでありんこのように集まりタツパーにものをせつせと詰めて眷属に食べさせようという姿は言うなれば働き蟻か、頬を膨らませて食べ物を罫に持ち帰るリスか。

「タケミカツチさんちーす」

「へーこつちが揚げ物、こつちが汁物ねえ」

「お、おい。：や、やめろお！揚げ物に無差別レモンテロだけは！唐揚げにソースをかけるんじゃない！」

「へいへいタケミカツチきゅん、君の絶望した顔みつてみたい！」

「あゝあゝあゝ!!!」

賑やかである。愉快的神が集まればこんな騒ぎは日常茶飯事である。

神話が入り交じる。それを誰も気にしていないのはまさに神の力を封印しているからに他ならない。

「皆の者！俺が！ガネーシャだ！本日は良く集まってくれた！——

——：：

本来高い神格を持ちうるヘステイアがタケミカツチと同じくタツパー片手に美味しいもの探しに勤しんでいるのも当然の事であった。

「んくゝんくゝ……」

「何やってるのよ、あんた。」

「あ！へファイストス！」

「久しぶりね。元気にやっているかしら」

養っていた神と養われていた紐神がここに再会した。ガネーシャの大きくて長い演説をBGMにヘステイアはヘファイストスへの用事を口に出そうとするも以前のグダグダした私生活を詰められれば「ぐぬぬぬ…」と唸るだけになってしまった。

「相も変わらず仲が良いのね。」

「ふ、フレイヤっ!？」

「あら、私が居てはいけなしかしら。」

「いや、そう言うことじゃない。僕は君が苦手だけど、それだけで言わなきゃいけない事を言わないのは間違ってるからね。」

「私に？心当たりが無いのだけれど。」

「シグリーヴァ君、君のところの子だろ。君とはあんまり関わりたくないけどあの子には助かってるし、ベル君もダンジョンで色々教わったらしいから。ありがとう。…礼だけだぞ！僕にはこれくらいしか無いんだから！」

タツパーを奪わせまいとする紐神のその様子にフレイヤはくすりと笑う。

「良いのよ、…それにしても、シグリーヴァも随分と入れ込んでいるわね。」

「ご飯とか持ってきてきているぜ！」

「ヘステイア、貴女餌付けされてないかしら？」

「…あの子やつぱり…」

辞めておけと言ったのにまだやっていたのかとヘファイストスは彼女の顔を頭に浮かべてため息を吐き出した。

「おーい！フレイヤー！ふえいたーん！どちびー！」

「うげえ…ロキ…」

裏側に色々と抱えながらも、それでもなお華やかさは変わらず。神々の宴は夜遅くまで続く。

はーい、神の宴から帰ってきた主神フレイヤに呼び出されてるシグ

リーヴァちゃんですよー。何か私やっちゃってましたっけ。

「ヘスティアとその眷属を気にかけて居るようね。」

えー、ストーリーカー？それとも視てる途中でした？……嫉妬？ベル君を取られると思ってる？

「何で知っているのかしら？」

知っているとしか言えないかなあ。マジで。ウソツイテナイヨ。

目の前から嘖き出す神威の中でも普段と変わらない表情のままなにをしちやったかなあと考えるシグリーヴァである。

貴女の眷属としてシグリーヴァ・ヘリアとして断言します。私の恋愛対象は同性です。あの兎君は可愛いですがどっちかというところは今は庇護対象って所ですよ。

最強の話題逸らしはカミングアウトである。

男に引っ張られている太極の魂は性癖的なものも男寄りなのだ。だけでも女の部分がない訳では無い。責められてみたいし……いやいや、何を考えてんだ。

神フレイヤがフリーズした。今のガチ認定した訳だ。

え？じゃあなんで私とはシないの？だあ!?

ビッチは怖いの一途な子が良いの！貴女の顔はどっちかという観賞用なの！雑誌の一面でも飾っていてくれ！

こうして疑いは晴れたものの、フレイヤからの夜のお誘いが増えました。解せぬ（）

モンスター・ファイリア。私？豊穰の女主人でウエイトレスしてますが何か

神フレイヤに詰められた3日後、丁度オラリオがお祭り騒ぎの真っ最中。今作の主人公であるシグリーヴァは：そう！ミア母さんのところに来ております！

神フレイヤからあの後

「知っているなら命令よ、私の邪魔だけはしないで。」

うーんまあそこまで言うなら。というか極力ベル君のルートは知ってるままにしたいんだよね。だから妨害する気も無いし神フレイヤのことは応援してるよ。……結果は知ってるんだけどねえ。

あつさり頷いた私に神フレイヤからの一言。

「そういえばこんな忙しい時なのに、豊穰の女主人は人手が足りないみたいなの。…手伝いに行ってあげて？」

……………え、何。自分がモンスター・ファイリア見に行ったりするから穴埋めにレベル7つかうと？ほんま？

「ええ、本気よ？そうね、夜前には戻ってくるからそれまでよろしくね？」

ツすー……。ガチやん。何やるか未定だけど保険として絶対邪魔させないでって意思感じるって。ミア母さんになら迷惑かけないやろって思われとる…。

え、じゃあ魔導書の一日付き合うやつ消化って事で。

「それとこれはまた別よっ。」

むきいいい!! (1敗)

はい、ちゃんと約束だけは守るシグリーヴァちゃんですよ。今はリユーちゃんに教わりながら落ち着いた緑の服に腕を通しておりましてよ。

いや、うん。分かってたけどさ。スカート履きなれてないんだよ。ストッキング履いているとはいえずんごい心許ないんですが！

あ、エプロンね。ありがとう。これで、こうして！髪留めもしたら！完成!!

リユーちゃんどうかな？多分初めてのスカート姿公開だよ？

「よく似合ってると思います。」

うーん淡泊！でもそれがいい！ちょっと慣れるまで動いてこようかな。

「シグリーヴァ！今日はキビキビ働いてもらうからね！」

いえっさーまいまぎー！席番号だけは覚ええました！常連だから大体のメニュー把握しております！スカートが慣れない以外無問題です！

「言われてみればずっとズボンだねあんた。小遣いやるからちやんとオシヤレぐらいしな！」

グサツと突き刺さる正論。シグリーヴァちゃんじゃなかつたら聞き流しちゃうね。

お、オシヤレしてない訳じゃないし。ズボンの方が動きやすいだけだし。

「それがオシヤレしてないって言うんだよ！」

うへえ。着物屋に何時間も居られない人種のシグリーヴァにはこの手の話は全部クリティカルである。

「たく。…そろそろ開店だからね！気を引き締めてかかりな！」

いえっさー!!

け、剣王?!?!

それ、豊穰の女主人の

シグリーヴァきゅんがウエイトレスだと!?!

ガネーシャのお祭りよりこっちだろ!

フアンサ！フアンサプリーズシグリーヴァきゅん！  
次の二つ名「神々のメイド」で決まりやろ！

ええ………（ドン引き）

ミア母さんにアーニヤと一緒に客が入るまで客引きしてきなと言われ、店の外に立って10分。

———行列が出来ました。

いや、半分位神じゃん。金無いからって眷属も一緒に並ばせるんじゃない。フアンサを求めるなそしてシグリーヴァきゅんと言うな言うならちゃんにしてくれ!!!

平然を装っていてもレベル7の聴力は彼等の欲に塗れた声が聞こえてきてしまつて。こういった注目は集めた事がなく混乱。

耳まで真っ赤にして厨房まで引っ込んでしまったシグリーヴァであつた。

この後めっちゃウエイトレスした。

シグリーヴァ・ヘリアの日常。それは37階層での闘争

レベル7。そのレベルに見合う経験値を得る為には生半可な階層では役不足。

然し一々モンスターを探して戦闘をする煩わしさもある。40階層より下でも、当然暇な時間は存在している。

その癖に緊張の糸途切れさせると丁度モンスターが不意打ちして来て死ぬ。そう。ソロはあっさり死ぬのだ。だからこそそんな非効率率は嫌だとシグリーヴァが編み出したのがこれである。

37階層無限闘争。白宮殿ホワイトパレスと呼ばれる場所にある闘技場。シグリーヴァ曰く強化種無限製造エリアにおける単独でのバトルロワイヤル。

レベル4の時にサポーターとしてオツタルの遠征に付き合った時に思いついたソレはレベル6の時から毎週行っているものでもあった。

49階層。フォモール、バロールをちゃんと立ち回れば壊滅させられるシグリーヴァならば楽だろうと思うだろうが、それは違う。

フォモールには発生の上限値がしっかりと定められており、それを討伐仕切れば終わりなのだ。

それに比べ前述の通り、37階層のココは無限りポップである。それに加えてしっかりと駆け引きを行う高い戦闘知性を兼ね備えたレベル4相当が24時間永久機関の様に襲いかかって来るのだ。

副団長の猫に阿呆と言わしめたこの荒行。その為2度目からはしっかりとサポーター二人の同行が義務付けられた。

今回のサポーター兼荷物持ちの一人目、ラーガ君。レベル4の狼。足がしっかりと速いから沢山ドロップアイテム持っても大丈夫だね！

2人目、シールズちゃん！こっちはサポーター兼非常事態時のヒーラーだよ！レベルは3の満たす煤者達の一員！後衛支援ポジの癖に

得物は魔法補助付き仕込み杖だつて。え、私に憧れて?…うーんそう言われたらなんにも言えない!

二人にはアスフィちゃんにお願いと言う名前の脅しをしてから買った隠密、消臭アイテムを手渡して、闘技場のすぐ外で待機してもらつてます。沢山のドロップアイテムやら荷物を持つ2人を守りながらはちよつと危険かな。

長剣に、対魔属性。そこに領域魔法まで合わさつたシグリーヴァは、単独でこそ力を発揮する。

一騎当千の魔法無効化ウーマン。言い換えれば味方の魔法すら妨害するウーマン。味方に合わせようとすればする程に手加減が必要になる難儀な性能は遊撃兵こそ相応しい。

ウダイオス。階層主がロキ・ファミリアに討伐されてからもうすぐで3ヶ月。

アイズ何某君のレベル6上げを妨害する訳にはいかんしなあ。でも2回連続でロキ・ファミリアに持ってかれるのは気に食わないしなあ。

そんな事を考えながら永遠に湧くスパルトイやリザードマン・エリートを殲滅し続けるシグリーヴァは、見守る二人にしつかりと見える速度で動いていた。

これがシグリーヴァが37層という浅めな階層で周回をしている理由。自分に縛りを設けながらサポーターの見取り稽古をさせる。

無論、耐久が上がるように受けて大丈夫な場所への打撃はわざと躲さずに受ける事も忘れない。

一太刀一殺。魔石を切らないように。然し一撃で瀕死になる様な強さで目の前の奴らを殺す。

はつきり言つてホームルームで戦つてるだけじゃ本当に強くなれない。自分が通つた道だ。

極論死なないし、だからこそ果敢に格上にも我武者羅に挑めるといふ理由にも繋がつては来るけれど。それではダメなのだ。

ずっとそれをしていれば上質な経験値は溜まる。基礎アビリティ

は上がる。格上に勝てればランクアップする。だけれど、そこに目的が無ければ発展アビリティも、スキルの発現も無い。ただランクが上がるだけの結果に繋がってしまう。

正直何度も死から蘇ることにより持っていた目標も削ぎ落とされ、頭も回らなくなる。…少しで良いのだ。その環境から外に目を向けた方が良い。

だから、折角だからと毎回違う人を連れ出してはこうして見せている。何が欲しいのか、何を目標にしているかは人それぞれだけど。…レベル6・7になった者として、一つの到達点は見せられる。

結構好き勝手やってるけど、それなりに考えて後進を育成してたりするシグリーヴァであった。

## 第ン千回神会

「神会だあああああ!!!」

「フレイヤ様にイシユタル様も来てる…眼福…眼福…」

「よつしやあああああああ!!!」

三ヶ月に1度開催されるソレ。レベル2以上の団員を持つ事を条件に参加が許される催し。

バベルの30階で開かれる神会には多くの神々が足を運ぶのだ。

当たり前ながら神にとって下界の子供達は一様に愛すべきものであり…文字通り玩具なのだ。

その思考は「命名式」にガッツリ現れていると言ってもいいだろう。

しつかりとギルドからも認められている機関の癖に内容は不真面目な巫山戯た内容が8割と言っても良い。むしろあの神々が2割ちゃんと話し合っているのである。それは褒められるのではないか

↑  
「そろそろ揃ったやろ。遅れてきた奴が居たら娯楽っちゅーもんを分かったらんからな。よし、第ン千回神会開かせてもらうで！司会進行役はうちことロキや！よろしゅうな！」

「ソーマ君がギルドに警告食らって唯一の趣味を没収されたそうです！」

「ラキアがまた侵攻してこようとしてるみたいやなー！」

情報交換という名前の神々の暴露大会の様な騒ぎはロキの的確な情報纏めと最後に極彩色の化け物の話。

こうして真面目？な話が終わった後に待っているのは、そう、「命名式」である。

一部の神の飯の肴、愉悦の行先。神は悶え眷属は送られた二つ名に羨望と尊敬を送る。そんな厨二感満載な時間に胃が痛くなる神、頬が降りてこない神、それを傍観する神と、顔に全て現れていたりする。

「ほい、エリカ・ローザリアは『美尾爛手』と」

『絶†影』なんてどうかな？」

「いや、いやああああああああああああああああああ!!!」  
「うわああああああああああああああああああ!!!」

崩れ落ちる神、噛み転げる神々。どれだけ高尚で強い武神だろうが神話体系のトップだろうが下界ではそんなもの肩書きにすらならない。

レベル5を単独で技量だけで制圧出来るタケミカヅチですら例外では無い。こんな、こんな…すまぬヤマト…。と言葉発せぬ骸となつてしまった。

順々に、命名式が進む。段々とレベル3以上の第2級、第1級の名前が出てくる。ここまで来るとさすがに巫山戯て良い相手は居なくなる。無難でかつこよく主神が納得する名前にする。

こういう時だけは神の頭はしつかり回るのだ。愉しむところは楽しみ、バカで無い限り引きどころは見極める。然し、容姿が良い者は例外であった。

「アイズきゅんもうレベル6かぁ。」

「昇格理由は…階層主単独撃破!?!」

「やべえよ、やべえよ。」

「変えるとしたら『剣聖』か?」

「似合わねえw」

「まあ『神々の嫁』だな!」

「…「だな!!!」」

「…殺されたいんか?」

「…「さーせんした!!!」」

「アイズはこのままや。ええな?」

と、こんな感じで。

さて、神々の玩具として「レベル7昇格」と「世界最速兎」どちらがトりに相応しいか。当たり前ながら後者であった。

「次は…シグリーヴァ・ヘリア…やな。レベル7やて。」

「はw」

「相変わらずのすこ顔」

「えっぐ。あの小娘も馬鹿な真似してるけどこっちも大概やろ」

「単独での「竜の壺」踏破って…」

「チートやチーターやん。こんなん勝てへんって！」

「フレイヤ様のとこロキ・ファミリアを完全に引き離したな。」

これにはロキのテンションが駄々下がる。せつかくアイズさんの自慢をしたかったのにもつと上を持ってこられたらどうしようもない。

「あの子から希望を預かってるんだけど、良いかしら？」

「」「どうぞどうぞ」「」

これが下界の神々の社会である。持つべきものは友ではなく暴力だと言われても仕方のない光景だ。

『戦士の王』それがあの子の希望よ。私が扱えるのは剣だけでは無い、だそうよ？」

「はいはいはい！豊穡の女主人で失言したベートキゆんがシグリーヴァさんに素手でボコボコにされるトコ見てました！」

「うん、ならそれで良くね？」

「はい、けつてー！」

「」「異論なし」「」

そうして美の女神は微笑み、まな板神は苦玉をかみ潰した顔へと変化したのだった。

## ベル君救出委員会会長シグリーヴァ

ヘステイアは……と言うよりもヘルメス、ヘファイストスが悩んでいた。

ベル君を探しに行くとかクエストを出したとしてもレベル2が現段階の上限。中層に向かわせるには些か所では無い力不足。

唯一のレベル4であるアスフィだけでは庇いきれぬ御荷物も引っ付いていくとなれば、絶対足りない。

ヘルメスがもう1人の確保に走る中、ヘステイアもその大きな胸を揺らしながら走っていた。手には紙切れひとつ。向かう先は「戦いの野」。フレイヤ・ファミリアのホーム。

零細ファミリアであるヘステイアの繋がりにはヘファイストス、ミアハ、タケミカツチ……程度であった。

唯一のその他の強い繋がり。ベル君とも面識があつて僕にも優しいあの……レベル7。

「君達！シグリーヴァ君は居るかい！僕？神ヘステイアさ！シグリーヴァ君にはいつもお世話してもらつてるよ！」

「シグリーヴァさんは……ギルドに出かけてます。」

「！恩に着るよ！」

シグリーヴァの筆跡である紙を見せて足踏みしながら聞けば少の間を空けた門番はしっかりと彼女の居場所を教えてくれた。

ダダダダダ！と彼女は走っているつもりだろうがどちらかというところどころ……と可愛らしい走り方であった。

揺れる胸、零れそうな尻。眼福だったけどフレイヤ様の方が良いなというのが門番だったフレイヤ・ファミリア団員の談であった。

「シグリーヴァ君!!」

おー、そうですよ。神ヘステイア。久しぶりですね。レベル7として『戦士の王』の二つ名になったシグリーヴァですよ。何か用事ですか？一緒に豊穡の女主人にでも行きますか？

「今は、……ッ。シグリーヴァ君、助けて欲しい。ベル君が行方不明になった。」

良いですよー。報酬は……うん、豊穰の女主人で1回奢ってくださいいな!

「ありがとう、ありがとうシグリーヴァ君。安心して僕も着いて行けるよー!」

安心して僕も付いて行けるよー!」

ん?あれ?これ、…あのイベント?あー、うん、悪くないな。18階層にウダイオスの大剣あったはずだし。…消し炭になるんだっけあれ…?」

「『戦士の正』?!?!?」

「レベル7?!?!」

「ヘステイア様どこにそんなツテがあったんですか?!?!」

彼女に連れて行かれた先には勝手に知っている面々、向こうもレベル7の顔を知らぬ訳もなくこうして直接話したことも無いのにお互い知っているという中々無い空間が出来上がっていた。

神ヘファイストス、ども。シグリーヴァちゃんだよ。何か欲しいのあったら取りに行くからね。

神タケミカツチ、噂はかねがね。コレが済んだ後に良かったら一手手合わせをお願いしたいんですけど…良い?やったね!

神ヘルメス。レベル詐欺バラされなくなかったら私の協力者になりましょうねー(小声)

あ、リオン。

こうして、向かう面々は揃った。

バベルの上から見下ろす美の女神はそれを止めることは無い。

あの子の魂が輝く方向に向かっているのだから。

ヘルメスに色々と懇願されては居たがヘステイアがシグリーヴァ

に泣きつきシグリーヴァがそれを了承した時点でこの件に関しては口出しも手出しもしないと決めたのだ。

「…でも、無断で外出するなんて。お仕置が必要かしらね？」

なんとか理由をつけてシグリーヴァを抱きたいフレイヤとそれを立っただま聞いているオツタルであった。

## うーん過剰戦力

私、要る？

気合いを入れて「グラム」も「フロツデイズ」も装備して完全装備で来たというのに。片手でフロツデイズの一本をくるくると回しながら最前線で木刀を風のように振るう妖精を見れば、そんな感想が口から零れ落ちた。

『疾風』が切り刻み、打ち漏らしや湧いて出てきたモンスターを『万能者』が仕留める。

無論、シグリーヴァも何もしていない訳では無い。役割は完全なる保険。1番後ろを歩きながら死角からの襲撃を一人で受け持ち偶に短剣を投げる事により前線の補助も熟す最強の個。

現在15層。正規ルートでダンジョンに潜って数時間。レベル4が複数人いるにしても些か早すぎる。

何も出来ないお荷物神が2人、自分の身は守れるレベル2が数人。レベル1も居るというのに、こんな駆け足レベルのスピードで攻略出来ている要因は明らかに『戦士の王』であるシグリーヴァがいるおかげであった。

リオンも、アンドロメダも。前線に出張っていられるのはシグリーヴァが後衛として居るから。

では何故シグリーヴァが前線に立たないのか。そっちの方が明らかに早いだろう。

それは今の神様達の様子を見れば分かるだろう。

「は、ッ、はっ。ふっ、…ベル君、ベル君どこだい？」

「ちよ、アスファイ、もうちよつとゆっくり…ッ。脚、足が吊りそうだから、！」

これである。中層の暗い圧迫感と強行的な駆け足での進行は、一般人とも変わらぬ神様の身体能力や精神力の限界値をもうすぐ突破しそうな程に疲労が溜まってきているのだ。レベル4の速度でギリギ

りなのにレベル7の速度に付いてこれるわけがない。

「少し、休みましょうか。」

ある程度の大きな場所へ出れば、そうリオンが提案する。軽く壁に傷を付ければ少なくともこれが直るまではモンスターは生まれえない。持ってきていた多めな水分と甘味。神達だけでは無く未だになれる事の無いレベル2のタケミカヅチ・ファミリアの眷属達にも渡して行く。

未だ、ベル達は見つかからない。ここまで来て居ないのだから18階層を目指して突き進んだと考えても良いのだろうと結論付けるのも早かった。

「賛成5つか。よし、決まりですね。18階層に向かいます。」

当然私も18階層を目指す案に賛同する。

「彼等の中には肝が据わってる参謀が居るようですね。」

ゴライアスが居たら私がちよいちよいつとぶっ倒しますのでご安心を！まだ役に立って無いしねえ。

「貴女が居るからここまで早く来れている。卑下することは無いというのは上からですが…。」

まあ、まあ。でも鈍ってないみたいだね、その業。

返答は沈黙。それも致し方ないだろう。あの時、私は彼女を選ばなかった。

「正義」に縛られ、また「復讐」に取り憑かれた彼女を救えるのは彼女自身であったから。

まあ、復讐をしてもしなくとも死した者が帰ることは無い。ならば盛大に復讐すれば良いというのがシグリーヴァの考えであるから止めもしなかったのだが。

16層。当たり前ながら苦戦する様なことも無くサクサクと正規ルートを攻略して行く。特に特筆すべき部分も無く、休憩をしつかり挟んだ為か神達の小走りもスムーズに進んでいた。

17層。18層の安全地帯へ繋がる唯一の場所にして門番が君臨する『嘆きの大壁』。

長方体の広間への入口。そこに到達すれば、その門番がしっかりと通り道を塞いでいるのが分かるだろう。

「ゴライアス」

推定レベル4相当の階層主。灰褐色の肌を持つ7m相応の背丈を持つ「迷宮の孤王」

本来リヴィラのならず者達の総力を以って討伐されるソレは、背後の『嘆きの大壁』が崩壊している事から産まれたばかりであることが伺える。

「オオオオオオオツ!!!…ツ!?オオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

本能が儘に咆哮する。絶対的な『存在』として、侵入者にその鉄槌を振り下ろす為に。

されど——それ以上の『絶対的』が存在すればどうだ。

シグリーヴァが圧倒的な威圧感を放った瞬間に、ゴライアスが怯む。

先程までは力の誇示であった咆哮が、今ではゴライアス自身を鼓舞する様なそんな声音になっているのは聞き間違いでは無いだろう。

レベルが1つでも離れていれば力の差は歴然とした世界での「ゴライアス」と「シグリーヴァ・ヘリア」。コレはシグリーヴァに経験値すら入らない一方的なモノ。

さて、さて、さて、さて。皆さんは待つててくださいねえ。やって来ますから♪

今まで後ろでちまちまとサポートに徹していたシグリーヴァはヤル気満々だ。フラストレーションが溜まったとも言えるだろうか。

それもそうだが。神ヘスティアに初めて自分の業を見せるのだ。ヌルツとじゃ無くてド派手なのが良いだろうか。

あ！ヘルメス！お前が楽しみに舐め回すように見るんじゃない。後でアスフィに折檻して貰おう。

ゴライアスを倒す手段としてはつきり言つて徒手でも良いのだ。でもせつかくド派手にやると決めたならそうするのだ。

散歩に行くよりも、「豊穣の女主人」に行くより気軽に。ここがダンジョンである事すら忘れた様な軽い足取りで。

片手には「グラム」威圧も、魔力の補助も無い。魔法なんでもつてのほか。

「……オオオオオオオオオオオオオオ!!!」

そら来た。

先程の威圧。本能を振じ伏せるレベルが3つ上からの殺意。それを刻み付けられたゴライアスが我慢出来ないとばかりに自ら死地に飛び込んで来たのだ。

——一つ。

伸ばされ叩き潰そうと振り下ろしたゴライアスの右腕を縦に裂けるように切断。ズルりと滑り落ちるまで切られたことにゴライアスが気が付かない絶技。

——二つ。

攻撃一辺倒で防御は皮膚の強さに任せ切りなゴライアスを嘲笑うように両足が膝上から切り捨てられる。

——三つ。

左手を地面について足掻こうとするゴライアスの首を綺麗に切り飛ばし、終とする。

足掻くことも、再生も、咆哮も許さない。

「グラム」の刀身が長いのは本家リスペクトもあるがそれだけでは無いのだ。

対階層主。ソレを想定した場合こうなった、という側面も含んでいるのだ。

——ざぶツ。ゴライアスだったモノが塵へと還る。  
残ったのは魔石と皮。しつかりとドロップ品にも心を配った「狩り」をしていたシグリーヴァであった。

神へステイア！どうでしたか！これが私ですよ！——  
——え、見えなかった？そんなあ………

(シグリーヴァにとっての)ご褒美回

18層で無事神へステイアとベル君は再会出来た。良かった良かった。安心したよ(棒読み)

ゴライアスを真正面から討伐した証である大きな魔石とゴライアスの硬皮。剣は既に背中に戻し、両手にそれ等を抱えたシグリーヴァは人目も気にせずベル君に抱き着く神へステイアを保護者の様な目線で見ていた。

それにロキ・ファミリアに保護されてるのは分かっていた。どうしようかなあ。最後に会ったのが豊穣の女主人なんだよなあ。元日本人としては気まずいとかなんというか。

「シグリーヴァ・ヘリア」

おろ、なんですかヘルメス。

「ちよつと、時間作って貰えるかい？」

良いですよ。まあ、予想はしてますけどね。無事に兎君と神へステイアも会えだし、ロキ・ファミリアが陣取ってるし。時間潰しには調度良いかなと。

「いやいや、助かるよ。」

「さて。…君の手助けは正直予想の外側だった。でも言わせて欲しい。ありがとう。こうして無事に僕やへステイアが安全にここまで来れたんだ。」

うんうん、そりゃね。神へステイアが助けを求めてこなかったらこのイベントに関与する気無かったし。

連れてこられたのはリヴィラのバーみたいなところ。裏路地も裏路地の隠れた名店？みたいな立ち位置だろう。秘密の話にはもってこいだ。

「俺からお願い…というよりも懇願したいのはベル・クラネルについてだ。…随分と彼を可愛がっているみたいだけど…あの子の可能性が見たいんだ。一度だけ見逃して欲しい。」

頭を下げるヘルメスのちようど右後ろに目をやれば、空気が動く。デモンストレーションのつもりでしたか、アスファイ？まあ、…そうだね。邪魔はしません。…が、それに伴って起こる何かしらについても私は傍観します。良いですね？

「……ういや、助かるよ。でも、ヤバかったら助けてくれよ？」

神ヘスティア位神望あれば助けるんだけどなあ。気まぐれだと思ってください、私は本来ここに居ないんですから。

ヘルメスの返事を聞くより先に席を立つ。私からしてみれば「偽ハデスの兜」である。高位の冒険者になればなるほど五感は良くなるものだ。神の名前を入れるにはまだまだ拙いとシグリーヴアは思います。

さてさて、野郎と話す為に着いてきたわけじゃないんじゃないかと。というわけで！

リユーちゃん一緒に水浴びしようZe!!!

「は？」

あ、いや、その冷たい目は辛いです。ほら、私フレイヤ・ファミリア。あちらはロキ・ファミリア。ね？一人で水浴びはつまんだらうからほら…お願いします一緒に行きましょうよね？

「良いでしょう。然し…偶に欲を含んだ視線を感じます。それだけは辞めて欲しい。」

「……………ツ……………ちよつと、む、無理…かな？」

「何故ですか？」

いや、ほら、ね？私の恋愛対象女性だから……はい。

「…それは本当なのですね？」

YES。そうですガチです話したのはフレイヤと貴女にだけだ。ごめんね、こんな所でカミングアウトして。一人で水浴びしてくるから許してほしい。

「——はあ。…ならば、一つだけ。水浴びが終わったら私の家族

である者の墓参りへ着いてきてください。貴女ならば、喜ぶはずだ。」  
……了解。リユーちゃんが寛大なエルフで助かったよ。一人で静かに水浴びなんて何時もやってるから寂しかったんだよね。

擬似的な太陽が18階層を照らす。武器を地面に。肌を晒し、湧き水に浸す。こうしたなんとも言えぬさっぱりとする感覚は、男であった頃よりも女である今の方が感じが良い。

本当に他愛もないことをぽつりぽつりと向き合いながら話す。互いに裸。裸体。方やエルフ、方や英霊の現身擬き。容姿端麗で知らぬ者が見れば精霊の泉の如き光景であろう。

うーん眼福。えっちいと云うよりも綺麗が先に来るわコレ。だから、欲を含んだモノが表に現れることは無かった。なんであんなにカミングアウトしといてなんにも無いんだらうか。

細っこい手脚に控えめな体付きながら痩せている印象は一切与えない黄金美の彫刻の如き流動的な身体。

ぼんやりとリユーの括れが綺麗なお腹辺りに目線をやっているシグリーヴァであったが、リユーも、シグリーヴァを同じ様に目を向けていた。

4歳年上、最強の一角であり——自分の復讐を否定も肯定もせず制止した。最初の印象は掴みどころがなくよく分からない人物であったが、豊穡の女主人で関わってからは少しずつシグリーヴァとしての形が見えて来たようにリユーは感じていた。

何処か、男らしさを感じながらもその無垢な笑顔は年齢相応の少女らしさもあつて。それで居て、あのフレイヤファミリア特有の洗礼を積極的に朝から晩まで嬉々として参加していた者でもあつたのは確か。だからこそ、裏付けられた対人技術と圧倒的なアビリティを持っている。

まあ、つらつらと並べ書いたがそんな事はどうでも良いのだ。共にこう肌が触れ合うような距離に居て嫌では無い数少ない人物。そう、本能がシグリーヴァを認めていた。

「誰だ!!!」

おや、兎君じゃないか。一緒に入るかい？

元男だからか、恋愛対象外のベル・クラネルの前だからか。水が滴る髪を乾かし、ある程度身体から水気を拭き取ってもシグリーヴァは肌着を身に付けただけの状態で涼し気な風に身を委ねていた。

この階層位なら護身用の武具すら要らない。

普段から、かちカチつと肌を晒さず常時長袖長ズボン手袋姿の最強の一角のレアな姿。

「リユーさん、シグリーヴァさんのあの姿見たことありますか？」

「昔から彼女のことを知っては居ましたが、あれ程肌を晒している姿は見たことがありません。眼鏡無しで大丈夫なのでしょうか」

聞こえてますわよ（）

そりやほぼファミリア内でしか脱いでないけど！汗一つ浮かべず涼しい姿で塵殺するのがシグルドだ。そのイメージをそこら辺で壊したい訳じゃない。

漸く満足したか、鞆やかな四肢を服の中に納めてゆけばいつも通りの伊達メガネシグリーヴァさんだよ。

リユーに伊達メガネを意地悪したいが為に掛けてみる。あら、意外と似合ってる。あー、ヘインに雰囲気似てる気がする。リユーとしても似合ってるんだけどね、あの師匠ヅラが浮かぶのはちよつと宜しくない。

目が悪い訳じゃないんだよ？ほら、こっちの方が似合っていないかい？まあ返事を聞いているわけじゃないんだ、私はこうで在るべきだからね。

「どっちのシグリーヴァさんもかつこいいですよー！」

ノータイムでそんな事が言える兎くんには100点満点をあげちゃおう。他の子には可愛いと言ってあげな？私にはカツコイイで良いからね？

さてリユー、墓参りに行くんじゃないのかい？

「そうですね…」

私は行けないからさ、兎くん連れて行けば？折角の縁だし、ね？  
原作ぶち壊す訳にもいかんし。丁度いいから一緒に行きな？つて  
とんとん、2人の肩を叩けばその場を後にした。

.....

18階層が揺れる。森の端でうたた寝をしていたシグリーヴァを  
叩き起こす。

元日本人故に地震耐性は付いているのだが、冒険者になってから害  
に対して敏感になった自信もある。

知っていたからこそ、不思議では無い。ヘルメスが兜を渡し、ベル  
にちよつかいを掛けたのだろう。

知っている。だけど、折角だからその目で見たい。17層への道が  
閉ざされる。自分ならば吹き飛ばせる可能性はあるが…余波でジャ  
ガーノートが出て来てしまつては元も子もない。

地面が、二度揺れる。

「はっ。」

ダンジョンの天蓋からは既に黒いゴライアスが生み出されている。  
想定レベル5。下層で無い場所に出て来れるギリギリのイレギュ  
ラー。

……ビシリ

蜘蛛の巣の様にシグリーヴァの足元に亀裂が入る。

黒いゴライアスは18層で産み落とされた。この階層内に居る者を殺し切るとなればゴライアスだけでは不可能と、ダンジョンの本能はそう吠えた。

最低19層。最高で…35層か。流石にウダイオスの領域よりは上だろうが……私が居るからダンジョンもなりふり構って居られなかったか。

ダンジョンは気紛れで、物語的には美味しいだろうがそれなりにルールつてもんがゆるゆるだ。

こんな所に閉じ込めて蓋をした神の眷属。忌々しい神の力。逃してなるものかと。

シグリーヴァが飛んで退いた瞬間に階層を無視して文字通り昇ってきたモンスターを感覚で捉えて…一気に顔が引き締まる。

バロールと同等。なんなら竜の壺の方がまだマシな可能性がある。見晴らしの良く無い森の一角。既に至近距離といって良いこの距離。そして此奴をゴライアスに合流させてはならぬ事。

鈍く銀が押し出された黒。その色を、姿をシグリーヴァは知っている。

色は今世で。既に抜刀して右手に収まるグラムと同じ輝き。ヘファイストスの業が加わったと云う絶対的な違いはあれど本質的には変わらない。

荒く削り出された様なソレは十分にシグリーヴァを冥府へ突き落とす性能をしている。

見た目は前世にて。細部は流石に異なり全身がアダマンタイトとミスリルの純合金に包まれ、両前腕には武器となり得る刃を持ったソイツ。

後に何か分類を付けるとするならば「禁忌種」か。記憶の中のソレは中ボスで意外と顔が柔らかかった記憶があるのだけれども。今で

は硬い外皮に覆われてしまっている。

怒り状態なんてゲームの数値は無い。初っ端からフルスロットルなのだろう。

赫く輝く両眼で此方を捉えながら、森を引き裂く様な咆哮が放たれた。

## 前門のゴライアス後門の■■■獣 2

ゴライアスが。リヴィラの住人が。風のエルフが、主人公が、神が。圧倒的な威圧感に同じ方向を向いた。

漆黒の殺意。その意図をある程度察せたのはヘルメスだけであった。

「……………ッ、！ダンジョンもなりふり構ってないってことかい？」

今までに感じた事の無い明確なダンジョンの意思。ブチ切れたのだろう。勝手に入って来た神を殺そうとしたら偶然居合わせた場違いのシグリーヴァに。

だからこそ怒りに任せてルールを無視した。どんな代償を世界に支払ったのかは神としてのヘルメスには分からない。だけれども、あの圧は決してLv7に劣る様なモノでは無かった。

数秒の澄み切った静寂。次いで湧き上がる鬨気の余波。太陽の様に熱いソレは冒険者モンスター問わず震え上がり、膨大な熱量として口から吐き出された。

「君の神話を見られなくて残念だよ。」

英雄譚というには、もうシグリーヴァは強くなり過ぎた。傍観者が居てこそその英雄譚、本人では無く周囲が見定め、押し上げてこそその勇者、英雄。その枠組みには入り切らない。

ベル・クラネルの物語が紡がれるのをハットを抑えながら後方で観ながらも、勿体ないと口に出してしまう。

「帰ってきたら聞かせてほしいな、君のヴォルスング・サガを。」

二つ名にもルビ付けされているその呼び名。神話の物語。多くは神が試練として降するのが大部分だとするならば、この戦いは異端である。

ダンジョンの尖兵。適正階層だけで言えば61よりも下。特殊な外装を含めれば70階層でも通用するだろう。

美の神の戦乙女。自由で、魂だけは異質で。それで居ても根本は善である。何者にも不可侵の矜持、その背中は正しく英傑である。

本能のあるが儘に突っ込んで来ない初見のモンスターを真正面に置きながら、シグリーヴァは舌打ちを一つ。

強化種は確定。カタログスベックだけで見ても攻撃が通るかは未確定。

靱やかな体、尻尾、四肢、本来なら弱点に成りうる頭部、顔。その全てに動きを邪魔しない様に鱗や硬い外皮が覆ってしまっている。

斬撃△。やってみないと分からない。予想通りなら効果は薄いだろう。

刺突○。関節や目等、必要最低限の部分は露出している。露出する瞬間を狙ってフロツデイズを打ち込み杭にすれば動きを阻害することは出来るだろう。

殴打○。といっても内部破壊の一撃では無いと斬撃以下に成り下がり自身の拳を逆に傷付けるだけだろう。

魔石の破壊、頭部の欠損、四肢と尻尾の切断。確実な方法を探る為には、手を出すしかないか。

宙に浮かせる刃の煌めき。神が本気で鍛えた芸術の如き量産品。壁を殴る様な腹に響く音に加えて亜音速で射出された短剣達。

「様子見とは言えど加減は無しだ。」

両目、口、前腕の関節。抜け目無しの本気。逃げるであろう先に追加で数本弾き出してから、自らもグラム片手にソレを追う。

相手の全体像を瞳に頼らず俯瞰する。狙うは首筋、射出した短剣が効果を発揮したしてない関わらず隙にはなっているのは確かだろうから。

尻尾がしなる。咆哮の時にビタン、ビタンと地面を斬り裂いていた鋭利なソレをモンスターは腰をあげるにより頭の前まで振り下ろしが届く様になっていた。

狙われたのは頭部。今からグラムを引き戻すのも無理がある。反射的に【魔装】に魔力を注ぎ込む。引き上げるのは力、器用と敏捷。

スウエーの様には身体を逸らし捻ることにより尻尾を透かし、レベル

7の力によって強引に首筋にグラムを叩き込む。

不意に肩口が裂ける。尻尾は完全に躲していたから衝撃が来ることも無く突然に。

血が吹き出す様な傷では無い。1文字に皮が裂けるように切れてじくじくとした痛みが走るだけである。

対するモンスターも同じような傷を首筋に追っていた。弾かれる事は無かったが異様に硬い外皮に無理やり刃を引いたからか、薄い一本線が刻まれているだけであった。

あー痛い。いや、耐性あるしアドレナリンとばどば出てるから厳密には痛くないんだけど。あの傷とこの傷は釣り合っていないだろうと考えても。

——フウウウ！

空が唸る。そんな音と共に尻尾の先から鱗らしきモノが射出されること計二回。軽いステップで躲した1度目は頬に浅く傷を。2回目には大きく避けたが為にダメージはなかったが…。

目の前の持つモンスターの特性か、現状尻尾だけは大きめに躲さねばダメージを食らうことがほぼ確定した。裂けるような風、空間。何れかに干渉している筈である。

もっと攻撃力を上げる手段は幾らでもあるが…如何せん魔力を使うものばかりである。短期戦闘で勝てる程柔いモンスターでは無い。

原作を見届けたかったなんて雑念は既にシグリーヴァの中から消え去っていた。そんなことよりも『シグルド』を示す為に、ポーチにポーション達と共に入っていた丸薬を取り出せば包み紙ごと噛み砕く。

37層で30時間以上戦い続ける時だけ服用するモノ。例えるならエナドリとカロリーメイトと依存性の低い大麻を混ぜた様なソレ。『蒼天よ、堕ちろ。黄昏よ、来たれ。』『グラム』…往くぞ。」

グラムから噴き出すように付与された黄昏がシグリーヴァの身体に纏わり着く。『魔装』で強化するのは力、器用。

今までの攻防にて敏捷はそこまで必要無いと分かる。必要に応じて強化はすれど、グラムとの併用では先に此方が潰れかねない。

既に防御を貫通して来るのは分かっている。だからそこに回す魔力が勿体ない。

真面目に魔力切れのタイムリミットを計算に入れながら、それでも限界を超える時がまた来たのかと云う直感を持つ。

ゴライアスが討伐されても、コレを倒さねば神は死ぬ。主人公も死ぬ。リユーム、ボールズも例外は無い。

レベル7になって初めての死闘が始まる。





魔力を回す、我が業を詰め込む。何回と刻んだ空への動きは身体に染み付き——動かぬ頭を本能が支える。

「禍津・黎明剣」

無数の光が異形に突き刺さり、寸分変わらず拳で破壊した肉丸見えの臓物にグラムが突き刺さる。

ふんわりとグラムの柄頭に添えられる両の掌。息を吐き出すが如く内側から破壊する寸勁の一撃が魔石を砕き、異形を爆散させる。

膨大な塵と共に落ちるのは異形の外装。Lv7の素の力ではどうにもならないレアドロップ品。それが二つも。慎重に拾おうとして、そのまま塵に頭からつんのめる様に崩れ落ちる。

「……う・あは、あははっ」

限界を超えた身体、アドレナリンがドバドバと吐き出されているから今は笑っていられるがエリクサー使う様かな。

いつの間にか静寂と、水の音が耳に入る。向こうも終わったか。それだけわかっただけで安心である。

キュポンと栓を抜き一本丸ごとエリクサーを煽って…笑って。息を引き取るかの様に静かに意識を落とした。